

「気に入った？」

「気に入った、っていうか。本当に豪華ですよ」

貧乏ボロアパートに住まう人間としては、豪勢すぎて落ち着かない。

「住めば慣れてそんなことも思わなくなるよ」

「そんなのですか？」

けれど、帝人は自らの住まいに慣れて愛着もあるが、それでもボロいと思うし狭いと思う。それを思うと、慣れてもやはり豪勢は豪勢のままではないか、と思うのだが。

「試しに住んでみる？」

「遠慮します」

からかう口調で問われ、速攻で断る。こんな場所、自分には分不相応すぎる。冗談だとわかっていても遠慮したい。

「そう」

つまらなそうに頷き、ソファに座るよう勧められた。言われたとおりに座ると、このソファがまたいかにも高級そうで、逆に居心地が悪い。所在なげに座っていると、上着を脱いだ臨也が当然、とばかりに帝人の隣に座る。

「あの、臨也さん。近い、です」

ぴったりと身体を押しつけるようにして臨也が座るが、このソファは大きい。後一人くらいは余裕で座れるくらいに。だからもつと、ゆったりと座れば良いのにと思いつつ少し横にずれようとする、腰を抱かれた。

「え、あの……っ、——ん、んんっ」

唇に触れる柔らかな感触。

予感とはなかったと言えは嘘になる。顎を指で持ち上げ、少し上向きにされると舌で唇を開くように催促される。

（えええええっ）

唇に触れることを許すだけでも帝人としては結構な勇氣を必要とするのに、それ以上を当然、とばかりに催促してくる。思わず頑強に唇を閉じてしまうと、微かに彼が笑ったのがわかった。

唇が離れ、安堵して息を吸い込もうとする。と、そのとたん、とん、と身体を押された。ソファの上だから衝撃は少ないが、あまりにも無防備になっていたので完全に臨也に押し倒される形になる。え、と思う間もなく、再び唇が重ねられた。今回は完全に予想外だったので、まんまと臨也の舌が自分の口腔へと侵略するのを許してしまう。

「ん、……んんんっ！」

どんどん、と慌てて臨也の背中を叩いて抗議したが、彼は少しも容赦してくれない。彼の舌に捉えられ、自分の舌を絡め取られる。どうしていいのかわからず、わかるはずもない。息継ぎの仕方すらわからない。だから、彼に存分に舌を舐られ、離れた頃には息も絶え絶えになっていた。

「いかにも初心って感じだよ」

「初めて、なん、だから、当たり前、です……っ」

ぜえぜえと息継ぎを繰り返しつつ言っていると、満足そうに臨也が笑った。どうして、こんな時すら魅惑的にうつるのか。それとも、こんな時、だからだろうか。そんなことをぼんやりと考えていると、臨也の指が帝人の衣服に触れてきた。